薬剤部季刊誌　68　号　2023年6月発行

くすり箱

発行
桐生厚生総合病院　薬剤部
発行責任者　阿部　正樹
編集担当者　下山　遥
大手　直樹

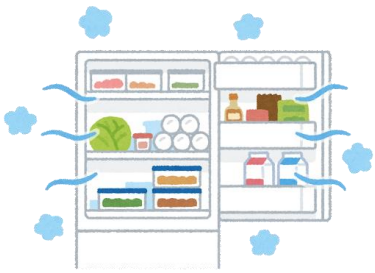
第 68 回目のテーマは、“ お薬の管理方法について ”です。

お薬は、温度、湿度、光などの影響を受けて変化しやすいデリケートなものです。
保管方法が悪いと使用期限内であっても含量が低下してしまい本来の効果が落ちてしまったり、
場合によっては、変質することで体に有害な影響を与えてしまうことも考えられます。
そのため、お薬は適正な条件のもとで保管することが大切になります。

お薬の冷所保存とは

お薬の保管方法は「日本薬局方（やっきょくほう）」という医薬品の規格基準書で以下のように定められています。

室温：1～30℃　冷所：1～15℃　常温：15～25℃



薬局方に基づき多くの冷所保存のお薬は、「2～8℃で保管」するよう規定されています。冷所保存のお薬は熱によって成分が壊れたり、溶けてしまったりするため、必ず冷蔵庫で保管しましょう。
ただし、冷凍庫や冷蔵庫内の奥にある冷気の吹き出し口付近では、お薬が凍ってしまう可能性があります。お薬は凍結すると成分が壊れてしまうものもあり、凍ってしまったものは解凍しても使用することはできません。
野菜室や冷蔵庫のドアポケット等の直接冷風が当たらない場所で保管するのがおすすめです。

冷所保存のお薬にはどのようなものがありますか？

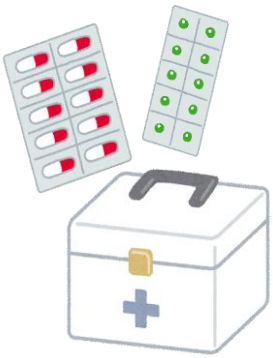
冷所保存が必要なお薬には、以下のようなものがあります。インスリンに代表される自己注射製剤は冷所保存とされていますが、それ以外の様々な剤型でも冷所保存のお薬はあります。
「錠剤だから、軟膏だから常温で大丈夫…」などと自己判断せず、薬局でお薬をもらう際は保管方法も確認しましょう。

錠剤	リアルダ錠®	冷所保存
坐剤	ボルタレンサポ®	冷所保存
	アンヒバ坐剤®	冷暗所保存
軟膏	アクトシン軟膏®	10℃以下
点眼薬	ジクロフェナク点眼液®	10℃以下
自己注射製剤	未開封のインスリン製剤（ノボラピッド®など）	凍結を避け、2～8℃
	未開封の GLP-1 受容体作動薬（ビクトーザ®など）	凍結を避け、2～8℃
	骨粗鬆症治療薬（テリボン®、フォルテオ®など）	凍結を避け、2～8℃
	抗体医薬品（ヒュミラ®など）	凍結を避け、2～8℃

お薬と湿度

お薬は高い湿度によって、変色したり変質したりすることがあります。
特に粉薬や顆粒剤は湿気の影響を受けやすく、時には固まったりすることもあり注意が必要です。
お薬はなるべく乾燥した場所に置き、湿度の高くなるキッチンや洗面所などは
避けるようにしましょう。乾燥剤を入れた缶に密閉して保管する方法がおすすめです。

光にも注意！



多くのお薬は光（紫外線）によって分解されてしまいます。
直射日光の当たる窓際を避け、光を遮断できる場所（容器）に
保管することが大切です。遮光の必要のある目薬は、
必ず付属の袋に入れて保管しましょう。

薬の使用期限について

病院から処方されたお薬の期限は、特別な指示がない限り、処方を受けた日から指示どおりに
使用して使い切るまでとなります。普段飲んでいるお薬が飲み忘れなどで余っている場合は、
お薬の品質が変わっていることがありますので、ご注意ください。
また、お薬の種類によっては、使用期限が記載されていることがありますが、これはあくまでも
未開封の状態での表示です。一度開封した場合は該当しませんので、使用開始後の期限もあわせて
確認してください。

最後に…

小さいお子さんがいる場合には、薬を子供の手の届く所に保管したり、置きっぱなしにしたり
しないようにしましょう。また、食品、殺虫剤、防虫剤などと一緒にしまっておくと間違って
飲んでしまう危険があります。誤飲を防止するため、薬と食品など薬以外のものは区別して保管
することが大切です。
冷所保存のお薬が凍ってしまったり、お薬の色が変わっていたりする場合には、お薬が変質して
いる可能性があります。変質してしまったお薬は使用できませんので、お薬が足りなくなった際は
処方元の医療機関に相談しましょう。

《参考資料》　ファーマライズ医薬情報研究所　薬局新聞、各種添付文書

次回は、“小児のお薬の飲ませ方”をテーマに、2023年9月発行予定です。